

『雨宿りごっこ』

木村 梓美

序章

《樹木と雨と桜の種》

雨上がりの森を、一人の少女が歩いていく。幼いながらも端正な顔立ちで、落ち着いた木肌色の瞳は深い知性を感じさせ、若草色の髪は梢の隙間からこぼれた光を受けてきらきらと輝いている。彼女の小さな足が地面を踏むたびに、濡れた土の匂いが辺りに広がった。木の枝葉から滑り落ちた水滴が水溜りに飛び込んで、微かな音を立てた。

少女の手には三つの小さな種がある。少し黒みがかったそれらを一瞥し、大切そうに握りしめた。細い小道を進むと、少女の行く手を遮るように背の高いシダの茂みが現れる。彼女は迷わずその深緑の中へと足を踏み入れた。

森一番の大樹の前、少女が目指すその場所に、一人の青年が立っていた。生い茂るシダを掻き分ける音が聞こえたのか、彼は振り返って彼女の名前を呼んだ。

「ハルハ。おかえり」

「ただいま、アマロ」

「この辺りの土、軽く耕しておいたけど……こんな感じでいいかな？」

「うん、ありがとう……いつも、ごめんなさい」

水縹色の髪をさらりと揺らして、アマロは首を傾げた。にこりと笑みを形作って、彼は眼前の小さな少女に語りかける。

「何を謝ることがあるの？ 僕が頼んで、手伝わせてもらってるのに。むしろ、たいしたこともできなくて、申し訳ないくらいなのに」

その言葉に対するハルハの反論を遮って、アマロは彼女の握りしめた拳を指さした。

「ここに植えるんでしょ？ さあ、早くしないとまた雨が降るよ」

「……うん」